

特60

510

路馬
道成寺
内外詣
望月
石橋

六



始



特260
510

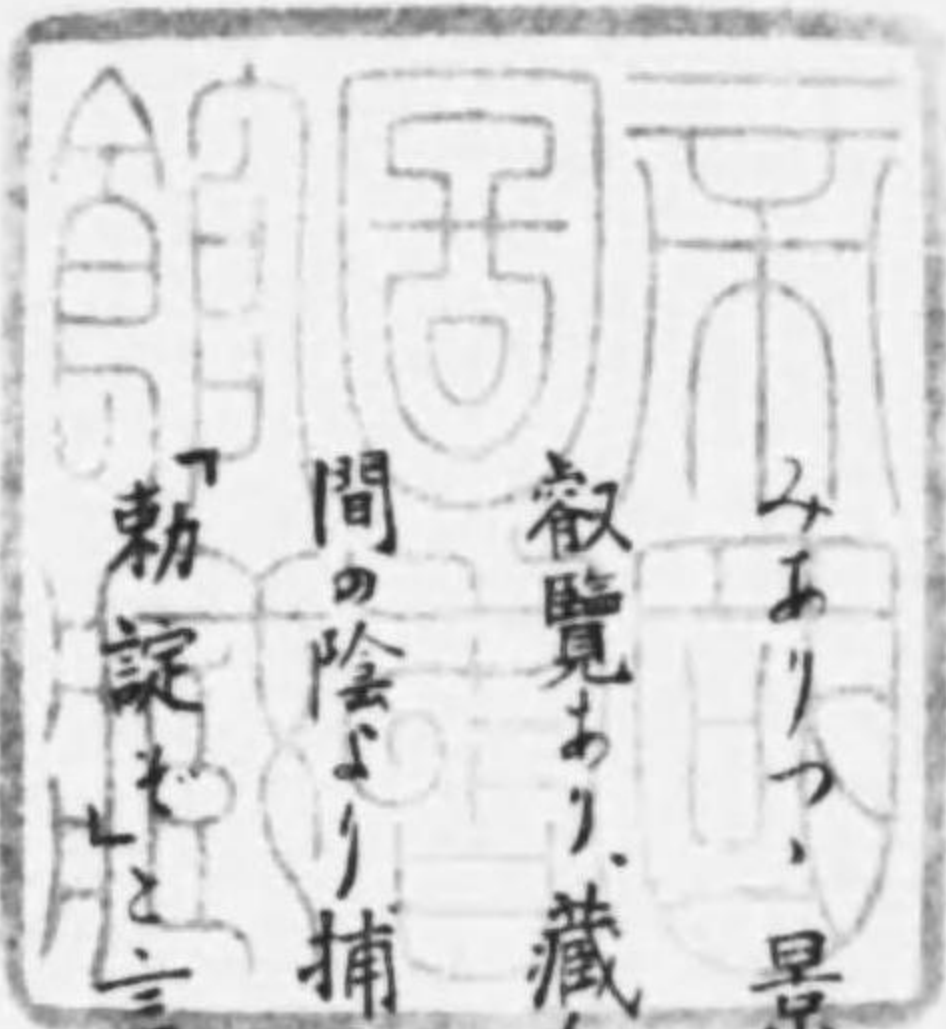


鷺

梗概

(所) 京都神泉苑

(季) 六月



時の帝、ある夏の日藏人、大臣など召されて神泉苑に御幸あり、池の汀にて夕涼
 みありつ、景色を愛で詩歌を詠じ遊宴を催はし給ふ、帝、池の汀に遊べる鷺を
 窺覽あり、藏人をして之を捕へよとの宣旨を下し給へば藏人承りて次第に狙ひ寄り岩
 間の陰より捕らんとすれども、鷺は驚き羽風を立て、逃げ行くにぞ、藏人声をあげて
 「勅、詔せし言ひければ、鷺は羽を垂れ地にふしたり、藏人捕へて窺覽に供せしに帝の御感
 めでたく、藏人にも鷺にも共に五位の位を賜り、舞樂を奏せしめたまふ。鷺は喜びて立ち
 舞ひてありしが、帝これを神妙に思召され鷺を放せとの御鏡ありければ宣旨をふく
 めて鷺を放せば嬉しげに何處ともなく飛び去りけり」と。



鷲

關能(四番目ニモ)

役別	装束附
シテ鷲	面必合冠者又ハ石王射(直面ニモ)白鉢巻 白垂 鷲立物 着付箔 白大口 白練壺折 白腰帶 扇
子方帝王	初冠 着付箔 白大口 單狩衣 腰帶 扇
ワキ藏人	侍烏帽子 着付厚板 白大口 掛直垂 腰帶 小刀 扇
ワキツレ大匠	洞烏帽子 着付厚板 白大口 狩衣 腰帶 扇
同 興鷲二人	着付厚板 白大口 腰帶

作物興

踏守 重習

大冠 一ツ上
 久月の月夜郎のめらりりも
 君の意より形 以上 文明君代
 の志願し第様の政事淳ふ
 四季折りの花をばでも控めたる
 敵意とらや 先青陽の春ふ

450

451

なまきコノ 愛トコロのたえニ御幸ニキ

^{大臣}杖シグレの紅ニ糸ニぶニるニ日コノ数ニも

積ツモるニ見ニ乃ニ行ニ幸ニ ^{大臣} カシ シヨ カ ニ ト セ

常ツ ガ ニ シ レ バ ^{コノ} カ ニ ト セ ト セ ト セ

今イマ ^{大臣} カ ニ ト セ ト セ ト セ ト セ

松マツ ^{コノ} カ ニ ト セ ト セ ト セ ト セ

海ウミ ^カ ニ ト セ ト セ ト セ ト セ

小車コクルマ ^{トヨ} ニ ト セ ト セ ト セ ト セ

井イ ^モ ニ ト セ ト セ ト セ ト セ

雨アメ ^サ ニ ト セ ト セ ト セ ト セ

浪ナミ ^イ ニ ト セ ト セ ト セ ト セ

上ウヘ ^ニ ト セ ト セ ト セ ト セ

小〇
謠

周縁イシネの心の裏ウラふ空ソラの裏ウラ面オモ白シロ丸マダラ
身ミ交マシう那ナ 路ミチの港ミナトの汀シノは
松マツききく 松マツもも松マツぬ住スミ居イ
いおのづから実ミ珍メらりにありとや
武ムスヒの対タイの船フネをう久キウ又マタい糸イト竹タケの
声コエあやをなま曲マカ水ミヅのう日ヒままつつ庭ニワるる

盃サカベも浮ウキぶあつあつ面オモ白シロの池イケあやあ
しるしる侍サマり者モノ 大長オホナガ 心ココロ花ハナ

にに 王キミ ああの湖ミヅ崎サキの路ミチを折マから面オモ白シロふ
ゆ捕トへく来キるる 大長オホナガ 雲クモををふ

いよいよ人ヒトああの湖ミヅ崎サキの路ミチを折マから
雨アメふふ思オモははれれるる 捕トへく来キるる 大長オホナガ

との道者ふてい コカ 宣旨畏く

承りし者なから カレ 彼なる教飛りの

翫いふをせん 大匠 やすら ツ上 ぶ

何れも普天の下 大匠 率ちの内 ツ 地

そと 大匠 思ふ心を 大匠 授り 大匠 ませ

次弟 コカ ぶ コカ 其らる コカ 法を コカ 祈ら コカ び

とらぬ コカ し コカ 夢 コカ して コカ 若 コカ なる コカ 後 コカ より

捕 コカ ん コカ とも コカ ま コカ じ コカ び コカ 路 コカ の コカ 教 コカ り コカ き コカ 羽 コカ 風 コカ を

ま コカ して コカ どの コカ と コカ あ コカ づ コカ き コカ ぶ コカ ち コカ から コカ あ コカ る コカ 哉

空 コカ う コカ して コカ 仰 コカ き コカ う コカ ち コカ あり コカ 雲 コカ あり コカ 汝

能 コカ 聞 コカ せ コカ 勅 コカ 後 コカ ぞ コカ や コカ 勅 コカ 後 コカ ぞ コカ ち コカ 字 コカ づ コカ ち

か コカ れ コカ ば コカ け コカ 路 コカ の コカ ち コカ づ コカ ち コカ 本 コカ の コカ ち コカ づ コカ ち

飛下り羽を垂れ地は伏せ抱き
とる龍顔は掛実なる王威
の意は有難や親母やそ皆人
感しけり実や弘法王法のか
時のためとて飛鳥のまは地は
敷き思ふは有難や

君の心は慈く作ぐ心も縁
ふ清酒を初めて法人は音楽を
奏し雨に踏みの花人召出されて
横の清感のゆる官を結びとも
なほ五位は踏みのまは妹も
まはるや湖の踏むは羽を

道成寺

梗概

(所) 紀伊國道成寺

(季) 三月

紀州道成寺の撞鐘久しく退轉せざるを再興して鐘供養を營む事となりぬ。こゝに一人の白拍子詣で来りたるが、女人禁制なれども供養の爲に舞をまふべしと言ひければ、入場を許さる。かくて白拍子は舞をまひ乱拍子など踏みてありしが、人々の眠りを催せるに乗じて、鐘をつかんと狙ひ寄り、「思へば此鐘怨めし」とて龍頭に手をかけ飛ぶかと見えて、其儘鐘引きかづきて、女をかくせり。されば人打ち驚きあへる所に、住僧出て来り、曾て撞鐘を退轉せし當時の物語をなす。則ち、さる娘に慕はれたる客僧此の寺に逃げ来り、事情を明かして鐘の中に身をひそめておれば、娘大蛇となって追ひ来り、鐘を巻き火焰を吐きて熔かし遂に客僧を取り殺せしが、女の執心残りて撞鐘再興に災をなさんとするものなるべしと。されば住僧等力を合せて祈りをなし、再び鐘を引揚げければ、先の白拍子蛇身となつて現はれたるを法の功力にて祈り伏せしと。

道成寺 (四番目)

役別	装束附
シナ白拍子	面曲見 髪 髪帯 平元結 着竹籬箔 腰巻 腰帯 唐織壺折 扇 物着 前折烏帽子
後シテ蛇體	面般若 髪 髪帯 平元結 着竹籬箔 腰巻 腰帯 唐織壺折 打杖
ワキ 道成寺の僧	金入角帽子 着竹白練 白大口 紫水衣 腰帯 小刀 扇 珠敷
ワキツレ 從僧二人	純子角帽子 着竹無地替手目 白大口 紫水衣 腰帯 扇 珠敷

作物 撞鐘 (口傳アリ)

道成寺 重習

是の紀列道成寺の住侶にては、
 さる子細いひては寺よ撞撞久敷
 退轉仕仕を^下某再興^{ツキ}技^{ガネ}撞撞と^上
 濟させては。今日吉日にては程よ。
 撞と撞様よあけ。同安供養を

てふ。いふは内ノ葉用中^{シカ}カ^{シカ}の
世^オを^オ歸^オませ^オて^オ送^オら^オゆ^オ。是^オ六
余^ヨの^ヨ女^ヨ人^ヨと^ヨ智^ヨり^ヨゆ^ヨ。是^ヨ六^ヨは^ヨ玉
の^ノ傍^ノに^ノ住^ノむ^ノ白^ノ拍^ノ子^ノに^ノて^ノゆ^ノ。西^ノ白^ノう
舞^ノを^ノよ^ノり^ノて^ノん^ノせ^ノゆ^ノ。ひ^ノら^ノに^ノお^ノま
せ^ノて^ノ送^ノら^ノゆ^ノ。あ^ノは^ノい^ノは^ノ海^ノま^ノり^ノ

宮^ノ人^ノの^ノ烏^ノ帽^ノ子^ノを^ノ替^ノ日^ノ一^ノ條^ノよ^ノり^ノて^ノ
船^ノ進^ノ取^ノ多^ノし^ノに^ノ送^ノら^ノ拍^ノ子^ノを^ノ進^ノけ^ノり^ノ
花^ノの^ノお^ノに^ノ松^ノ半^ノを^ノ一^ノ條^ノよ^ノり^ノて^ノ
袴^ノや^ノ短^ノく^ノら^ノん^ノ地^ノ元^ノ口^ノ傳^ノヨ^ノ中^ノに^ノ成^ノの^ノゆ^ノ
う^ノけ^ノと^ノ海^ノを^ノ一^ノ條^ノよ^ノり^ノて^ノ始^ノめ^ノに^ノ伽^ノ藍^ノ
た^ノち^ノを^ノ乃^ノ送^ノ成^ノ奥^ノの^ノ寺^ノあ^ノれ^ノ

うきよ

171

こころ だうしゆら 寺と名付り

や ^日山寺のや ^上其乃夕べ哉

来て ^日れ ^日おの ^日障ふ ^日ち ^日ち ^日ち

花 ^日あ ^日らん ^日を ^日あ ^日や ^日ち ^日らん

さ ^日る ^日程 ^日ふ ^日く ^日寺 ^日の ^日障 ^日 月 ^日落

る ^日障 ^日ふ ^日く ^日寺 ^日の ^日障 ^日 月 ^日落

日 ^日ぎ ^日れ ^日寺 ^日の ^日江 ^日村 ^日の ^日浪 ^日火 ^日熱 ^日に ^日對 ^日して
人 ^日と ^日眠 ^日れ ^日よ ^日い ^日傳 ^日を ^日と ^日立 ^日音 ^日の ^日程
にて ^日禰 ^日ら ^日ひ ^日よ ^日り ^日て ^日撞 ^日ん ^日と ^日せ ^日ら ^日が
思 ^日へ ^日け ^日撞 ^日恨 ^日め ^日や ^日と ^日と ^日純 ^日路 ^日よ
ま ^日よ ^日か ^日け ^日お ^日も ^日と ^日と ^日ん ^日一 ^日列 ^日う ^日は ^日さ ^日い
て ^日ぞ ^日失 ^日よ ^日か ^日る ^日 け ^日障 ^日の ^日あ ^日ら ^日る

ふ付いて、女人禁制とやらつる謂のふ
を語て、^ツツセ中^レハ一^レ皆^レか^レり^レり
中^レハ^二人^一信^レ心^レ均^レ中^レハ^三語^レ若^レけ^レ玉^レの^レ侍^レふ
其^レ那^レ子の^レ店^レ司^レとい^レふ^レ者^レ何^レの^レ彼^レ者
一人^レの^レ息^レ女^レを^レ持^レつ^レ。其^レ頃^レも^レ又^レより
熊^レ野^レ詣^レの^レ山^レ伏^レれ^レ者^レ一^レが^レ。店^レ司^レが

許^レを^レ定^レ宿^レと^レし^レ。年^レ一^レ泊^レり^レふ^レい^レま^レひ
け^レり^レたる^レも^レ孝^レあ^レと^レ我^レ持^レ来^レり^レ。彼^レ息^レ女
に^レ交^レへ^レふ^レ店^レ司^レ娘^レを^レ就^レ此^レの^レ飯^レり
ふ^レや^レ何^レの^レ客^レ信^レ我^レ汝^レが^レほ^レや^レま^レま^レよ
な^レま^レさ^レれ^レら^レを^レ推^レへ^レよ^レ。穢^レと^レ思^レひ
年月^レを^レ送^レる^レ。又^レ或^レ時^レ彼^レ客^レ信^レ来^レり

ふ彼女中極我をいかに捨て
強ふそけ度い男連ておりあれと
中客僧大さまは死あふ終き
店月が汗を逆きうぬをんか道に
まじりて遊ぶかふ山伏は寺ふ
あがやうの子細いよは

あつてゆ。ま早たまけてくれま
かされなきは寺のを若狭令
凡ふ徳しては。あなんと思ひ
其時の撞鐘をたる。生中ふ徳を。
去程ふ彼女あの日さのあつたを。
よきまことをりあましが。一まの

毒蛇と成り川と易い遊水渡り
十寺ふまづ愛かこり尋あつた
しづの種のおつたるを不慮おありひ
就頭とくまへ七纏ひまるとし尾おて
敷きば種はなはち湯と成て山伏
も即座ふ消ぬあんほう怖しき

物語にていふをぬり 梅雨信 かも忍愛
此物がたまを始めて承りてこそいへ
其時の女の執心残つて今も此種 コガ
ふ障礙をなますと学んべ つま信 年月の
行徳もか種^{シヤウ}の為^ゲよてこそいへ一有り
此行者で種を二度種^{シユ}構へ此上げ ロク

何きり〜と存じ コ見 我らも有様

存じ留る。面きも力を添へて送りし

心備せし コ見 水之つて日言川系ツ上の

去妙の救い存るも。行者の法カ

是ききり フモ倍 皆一同小声をあけ

東方小海三世 コ見 王 フモ倍 南方小

軍荼利救母 コ見 王 フモ倍 西方小犬

威徳の王 フモ倍 小方に金剛救母 コ見 王

中央に大聖不動 フモ倍 うちごくり コ見 動

ぬりさくくの星表漢之曼陀 コ見 白羅救

旋多摩河 コ見 曾遠那 コ見 沙婆婆多耶 コ見 牛多

羅叱干 コ見 給 コ見 我 コ見 況者 コ見 得 コ見 大 コ見 智 コ見 恵 コ見

コ見

コ見

知我身者歸身成佛と今の蛇身を
祈るうマカ 何の恨ら有明乃挂持既
つきがステル 我日上 志ル しく動く ぞ
祈きたカ返 しく 元けやてんまに
ふまの陀羅尼不動の慈救の得
明王クワ 火焰エン の黒々カ ありをミ 立て我

祈るまをカ 祈るらまカ 捧ねどけカ 撞
元カ 出カ 返カ しく 引カ 福カ といカ 撞カ 涌カ る
とぞ見へカ 符カ なく 撞カ 揚カ ぶカ 上カ たり

ハヤノ上
白ビヤク 龍リウ 白ビヤク 王ワウ 儀ビヤク 清ワウ 中ウ 央ウ 黄ウ 祿ウ 黄ウ 龍ウ
儀シヤウ 清ウ 方ウ 有ウ 龍ウ 儀ウ 清ウ 儀ウ 清ウ 西ウ 方ウ
祈働カ 寺カ 上カ
夕カ 阿カ 婆カ 入カ 付カ テ
同カ ヲカ リカ 噴カ 出カ ス

一代天子大子世界の恒沙の純王
哀愁納更哀愁自儘のみぎらん
なれ何必く大蛇の有べきそと行り
行らまか川をともまらぶぐ又起上て
忽と撞ふ向つて衝く息の猛火と
成る其身を焼く日ごの川浪。

深淵よ死んでぞ入よあるやまた
ぬと疾者まは我本坊よぞ帰り
る我本坊よぞゆりける

内外詣

梗概 (所) 伊勢

(季) 一月

臣下勅命を捧じて伊勢の太廟に赴き、神職に命じ祝詞を奏せすれば、神官
 畏みて天長地久上下安樂の御杖を奉る。抑も内外の宮の御神誨にも君臣の禮、父
 母の情、交友の信儀、夫婦兄弟に至る五常の道を説き給ふと物語り、されば勅使も
 心に染みて有難く拜聴し、尚神樂獅子舞を望めば、巫女は立ちて神樂を奏し、神職は
 太々の獅子舞を奉りて五風十雨も時に順び、幾万代まで弥榮ふる君が代を壽きて目出
 度舞納むと

此内外詣は十代目金剛又兵衛長頼の作なり然るに明治十五年謠本を版行するに
 當り祖父右近氏成改訂し之を加へたれども今回改版に際し長頼の遺稿に基き復旧
 候者也

昭和四年七月

二十三世

金剛右京氏 慧

内外詣 賜能(略三番目又四番目ニモ)

役別	装束附
シテ神職	直面 前烏帽子 着付小格子 綾狩衣 白大口 腰帶 前幣 舞台ニテ侍
後シテ同	烏帽子狩衣ヲ脱キ大口ノ上ニ腰帶 望月・通神ノ旗・厚板壺折 此仕積口傳 長絹 風折 扇 後見座ニテ物着
ツレ巫女	連面 髪 同帯 着付指箱 白練水衣 肩上ヶ前黄大口 腰帶 木綿袴 扇 幣 舞台ニテ侍
ワキ勅使	大臣姿
ワキツレ 従者二人	服同装 但し狩衣ニ非ズ 三番又四番勅使時ハ服風折 單狩衣 服連ハ素袍男二人ナリ

内印詣 重習

^{御遊三人}
^上 儀ノ長閑き日の申やく、内印の
 宮に参らん。 柝是ふ當今よ仕へ
 なる下也。扱も我君伊勢老神あよ。
 臨時の幣帛を捧げ給ふと勅とあや。
 以上 今別れの旅は趣ハ、^{三人} 春立や。
 上 三人

内印詣

矢きの浦に朝霞あさけ〜あ桐とうと
 みづ海乃影も常盤とこ見え後のちの
 炭すすをよそにのこま松まつに炭すすも終お麻あ川が
 関せきのささぎとそぞいけ伊勢いせの宮みや若わかも
 着つふたり〜つあまの程ほどぶ
 せの宮みや若わかもとていふと都みやこの神かみ若わかも

あるふとつらつら然しかるるつら
 清きよ代の仁に慈じも神かみ風かぜやいせれ宮みや若わかも
 出いるなり〜いあまの宮みや若わかも
 和わ光ひかりも短みづかるる影かげならる岸き〜あ有あ難がたや
 五十いそ鈴すずの法ほき宮みや柱はしらたた愛あい立たて秋あき津つ
 別わかれの神かみ若わかも威い光ひかり保たもつても

狩狩り何の酒も蔵の身ふあつた
 心を琢くに隔てあなまき形ごと
 人ふを謂くあつなまき心
 何とさて答へん事もなる
 愈増く内府に神意はまんと
 志も思ひなば唯心まを本として

小議

従事しては中やま
 是ちある宮人よまき事の下
 事にては何のむかひぞ
 小仕へなるは下なるが
 仕で有ぞとよ何と勅使ふくは座の
 とや中一の事
 唯今乃ち

返すぐもも目か度りそゆコカ 心ココロ

祝詞をよまらせゆクワロキ 畏オソくクワロキ 心ココロ

^上 謹上サイ再拜 高天の系に神集カンツマはして

天の岩戸を押シ開キき天アメは八重ヤエを

伊豆乃子チふフちチたタくクまマりリめメせセ 押シ

天長地久スグ上ウはハあアれレ下シはハ速スもモ安ヤスく

衆ムネしシのノ志シをヲ作ツクりテ終ハシむク後ノチ後ノチ

八ヤ百ヒャク弟ニ乃ニ神カミ等ト聞ク入リ納メ交フ交フ通ス入リ

^小實ヨ有リ野ノ也ナリ神カミ也ナリ神カミ也ナリ深コソきキ志シの

道ミチ廣ヒロくク万マン物モノもモ出デ生シ一イツ四シ海カイはハ波ナミも

翻ヒラしてシ実マコト君ミコのノ心ココロをヲ水ミヅみミづツよヨく

心ココロをヲ浮ウぶブなるルけケ目メのノ心ココロをヲ有アるル心ココロ

清淨心の政を深く天照大神の
シヤウジヤウシヤウ 神言に有難や ホニ 君子事して義を
 守り己を盡し身成研き忠信は仕
オノレ 孝は其道多き中 ツク 父母の我子に心よ信の深き者あれ
ヤ 遠隔も獨り有とても是れ

心よが事なると樂と云ふは
チ 心を盡す事 ニ 友と交り信あり
 曰 私の意趣を以て身を措く事あれ
ト 能令我と不わなりとも忍の為
 多見人を徳と稱て褒べし礼を
コト 弁むま婦兄弟朋友子孫家人よ

至るまで五帝乃さふけいあんは本
マデゴビヤウ
 道成験とておひふれ
ノ
 実者コト弱き物語んは深て学んたり。又
 時刻も来りて何る留る急ぎ神楽を
ヨクキタ
 来らせ獅子をもおひふれ 畏て
 いふやふる神樂とて来らせしきゆ

心持やしての中入 ウチノナド
 去程よ時頼り イソノトキヨリ

宣符が教も教ありて月も
ウチノナド
 雲も白妙れ神を返して神がくら
ツギ
 子早振ツギ 神上 夕日の月が十日れ 雨も
ツギ
 うほをふ獅子乃音 獅子 急ツギ 勢カクての行
ツギ
 山風揚子 玉安 乃 勢ツギの山風は波乃

故もあふ縁て幾方代も納まき
 望月神燈志らる渡るや東のるふ
 五色の雲も耀まじづる日神は女
 顯をれ給ふ如鳴るや内卯の宮居
 なほてり流や内卯はまき居乃榮坊
 春も我どくまき花

望月

杖檄

(所) 近江國守山の宿

(季) 正月

信濃の國の任人安田の壯司友春の家臣小沢の刑部友房は用を帯びて都に
 在る中、主人友春は望月秋長と口論して殺害されたる由を聞き、急ぎ歸國せんと
 せしが自らも狙はれらるゝとの風聞を得たれば、近江の國守山の宿に足を留め、かぶと
 屋といふ旅宿を營みて暮らせり。爰に又安田壯司の妻は寄るべを失ひたれば一子
 花若を伴ひ所々を迷ひ行くなり、偶守山の宿かぶと屋に投せりに圍うずも主従の奇し
 き邂逅とはなりぬ。折も折此處に敵の望月秋長来りて宿りければ主従は謀し合せ望
 月には素知らぬ體にて、妻女を盲目御前と偽り、夜の徒然に事よせて席に侍らせ、一子
 花若には八ッ撥を打たせ、友房自らは獅子舞などして興をそへ、望月の油断して眠氣
 を催す隙に乗じ、主従力を合せて遂に望月を討ち取り本望を遂げたりとぞ。

望月 (四五春目)

役別	装束附
シテ小澤刑部	直而 着付段髪平目 素袍上下小刀 扇
ツレ 安田友春の妻	面曲見 髪 髪帯 着付油 唐織(着流シ) 枕
子方 友春の子 花若	後シテ長袴ノトキハ 着竹厚板 白大口 小刀 腰帯ニモ 着竹縫箔 長袴 扇 羯鼓 太刀
後シテ前シテ同	直而 白袴巻 赤頭(柳子頭口傳アリ) 着竹段髪平目 白大口 厚板壺折 腰帯 扇 小刀(又長袴ニモ)
ワキ 望月秋長	着竹厚板 白大口 掛素袍 腰帯 扇 小刀 直 太刀(狂言モノス)

望月 重習

是ハ佐濃國の住人安田の彦司
 友春の清内ヨ有リ。小沢の刑部
 友房にてハ。扱も頼まきハ友春ハ
 從穿の望月と口誦^{コト}ハなぐ付れ
 強ひてハ其^{コト}折^{コト}部ハ折^{コト}ハひ^{コト}が。

け由承りゆるるまきしお玉マカリクダリ下知よ。
 敵の方より人をかぎ流次シユシにて某と
 孫ら子由と告急をゆるるお玉トも
 討まけ身出の者よカナシユクあつよ。
 上
 が大空のつらとあり毎日往來の
 旅人トとあやしく今日も旅人トとあやしく

ちやとなト娘ト浪の浮トるトも
 下安らぬト心トはト是トは
 伝濃圃の任人安田の店日友春と
 世介人の妻や子にて結トひト徳トも
 史の友妻トの同室の任人平月の秋長
 ぶトつトあトくト討トまトねトまトりト多トらトしト

從^シ難^カも路^チ教^クりぐにあり軽^クむ後^トりも
撫^ナ子^コよる若^シ獨^トり隱^レるをんと歌^クの
不^レ縁^ノの怖^レしき思^ヒひよさうしあひ
立^チある^{カヤ} 中^中 何^レ酒^ヲを定^メぬ旅^ヲと
信^ト法^ト活^トや 上^上 月^ヲを友^ト杯^ヲの友^ト斗^リ
片^片 名^ヲ殘^トを慕^ヒふ古^トに後^トるの

烟^ノを迷^ルふ 上^上 草^ノの枯^レれぬを
旅^ノ寐^ノの床^トに其^レ又^レ後^トるの宿^ヲをた
るを 中^中 漸^クなる行^キの是^ト
とや舟^ノの上^ノの宿^ヲをやらんやふしあ
宿^トをからん中^中の思^ヒひよさうしあひ
業^ノ内^ノやふ 誰^レにて後^トりかぞ

つま女

縁の者にてふし、叔の宿を借りて
 猿人ふくむらち宿を承りてふ
 扱を御玉より何方へお送りぬそ
 是は信法玉より人をも奪ねてお入
 上りて ホ女將と稱の人をも連れ
 御知事人をもおぼしめしなごころの
 つま女

此縁の側うこそゆいりくは通人

彼縁人へ信法の玉よりと仰は後よ。

何とやらんは懐しうゆひて能く身事

てゆくば古く某が頼になつてふ。安田の

店より友まきの妻やら子にしては産み

へふと美や一人海もゆい縁は影

志く成給ひし事コトの心ココロ痛イタくもいふ。

^上志シ名ナ家ケ方カタを付ツけし中ナカとなふ。

いふやよはそを我ワレも信シ徳トク法ホウにて

引ヒ使シされし小コ沢サキの刑ケ部ブ友トモ房サトウにてい。

かしたまき命イノチかからしく世ヨのまゝ忍シぶ。

おぼせぬ娘メ一ヒト粒つぶの涙ナミダはオホくホすコ溢トり

^上女メ

扱ア古コのコ沢サキの刑ケ部ブ友トモ房サトウあら

懐イくコをウりニてコ洞ツツとコ洞ツツ也ナリ

^上今イマ何ニもカ包ツむコもコ是コノ安ヤス田タのナ名ナ目メ

友トモ春ハルの妻メや出デるコ子コの果テ一ヒトなり

^上子コ方カタ

父チチよオもコせコるコ地チしてコ花ハナ若ワカ小コ沢サキよ

泣ナ付ツくコ別ワカれコるコ若ワカれコ面オモ顔カの

残るも今、懐くや、
取想て、
らきこ、
今、

今、
二世の契、
や、
今、

陽る娘、
孫と思、
星月の、
にて、
ゆひて、
野示の、

野示の、
ゆひて、
今、

本領悉く^{リヤウ}放され^{コトク}れ^テを。徳家^キを以^テ
か上^レくら^ハ本領悉く^{コトク}也^ク。始^メり^テ親^{ヨロ}の
眉^{マユ}をひら^カ兒^コ。唯^タ今^{イマ}本^ホ玉^{タマ}一^{ヒト}粒^リ下^タり^ル。
まぐ^マ同^{ドウ}守^{シュ}山^{サン}の^ノ着^キよ^ク忘^ワて^テい^ハふ^ハ確^カり
有^ルに^シか^クい^ハま^ニ着^キを^ト取^ルら^ズ又^マ某^カ名^ナ字^ジ
を^トま^シや^ルか^ク誰^トに^テ渡^ルゆ^クぞ

安^シま^シる^ノの^ノ事^{コト}は^シ着^キと^シま^シら^ズす^ル
に^テは^ハま^シふ^ハ座^ザゆ^ク大^{ダイ}名^ナと^シく^ス
ま^シ娘^メひ^テい^ハま^シ名^ナと^シ何^ニや^ルぞ^シカ^ク
い^ハま^シら^ズぬ^ルゆ^クか^クい^ハま^シゆ^クゆ^ク^シカ^ク
云^ハ活^カ道^{ダウ}改^{カイ}の^ノ事^{コト}に^テは^ハ只^シ今^{イマ}を^シ月^{ツキ}が
け^テな^シと^シて^ハぬ^ルゆ^クに^テは^ハ由^ユを^トた^ス名^ナ取^リに

志らせりし女と存じしふやよ。
今おけ家へ正月がきてゆ子方な
正月と申すは暫ト程近うゆ。
先改テはかへ入改テり今正月がきて
ゆ改テな改テ我改テも女改テの姿となる
事改テも偏改テに彼者故あれは改テい改テは改テも

謀らひて付て給ふゆ改テ中改テは事
是改テ天改テの改テあ改テる改テ女改テにてゆ程ふやが
本改テ意改テと違改テせ改テし改テま改テる改テしてゆ去改テあ改テら改テら。
彼者殊改テの外改テ用改テは改テ付改テ程改テ近改テ付改テて
便改テが改テあ改テる改テゆ改テ思改テ案改テを
思改テは改テし改テゆ改テ畏改テて改テゆ改テ今程は宿改テふ

さあ物さ自はあにしてい何の苦らう
 かしあへらふはあひてはあ後よ
 さいとこれ産あはあはあ某の満
 ちあへいあからいあへいあへいあへい
 ちあへいあからいあへいあへいあへい
 出立た 彼蟬丸の古く

たあもくもあをのあはあはあはあはあ
 一も今のあはあはあはあはあはあはあ
 るはあはあはあはあはあはあはあはあはあ
 盲目のあはあはあはあはあはあはあはあはあ
 旅人よあはあはあはあはあはあはあはあはあ
 誰かあ入ぬ 是はあはあはあはあはあはあはあはあ

夜をいひて酒をたしめし由
ちかか^{シカク} ちかか^{シカク}

是に酒の味して夜をいふ程に
酒をたしめし^{コカ} ちかか^{シカク}

てい^{シカク} 是に酒の味して夜をいふ程に
に^{マカリイデウク} ちかか^{シカク}

チカカ

ちか^{シカク} ちか^{シカク}
一^{カタキ} ちか^{シカク}

ぬ車^{チカカ} ちか^{シカク}
三^{チカカ} ちか^{シカク}
者^{チカカ} の^{チカカ} ちか^{シカク}

父を従尊は付せに候よ日付時來
 川をせつめるは候る相き父の
 かんよ父の敵を討ちやとせひのまよ
 出らし我ら又衰れは我おがめる
 或時おとひに持佛堂まよあつて
 兄の一弟香をたき花を佛は徳と
 焼

きば尊のちねまは中尊をほくく
 と守りてしふ兄は氣ゆのしゆを
 本尊の名をば我敵と友とやまま
 鈕を提げ繩を指我らを貯て立
 たせ候ふが憎れは走のあつて首を
 お断さんとやせはんの一弟是をゆき

上子方女コ しま〜 あり事ぞ佛ヤとぞ

日 不動コとコ敵コをコハコ友コといコふコとコあら

さコるコりコ 相コとコ佛コとコ海コもコ深コとコ扱コ

たるコ刀コとコ鞘コとコもコあるコせコはコ南コを

佛コとコ怨コをコ討コせコはコかコ〜子方しコもコあら

〜コ 暫コ 何コとコ深コゆコぞコしコもコあらコとコ中コハ

ハコ扱コをコおコうコとコカコスコ事コにコてコハコ扱コをコ

ふコおコせコゆコ〜コ扱コ身コとコ小コ機コとコあコたコあ

亭コとコ獅子コとコ花コとコ〜コいコらコバ

獅子コとコ花コとコ〜コ某コとコあコらコ事コハ

なコ〜コあコらコあコらコ扱コとコ〜コあコらコ〜コあコらコ

同コふコ知コるコ者コハコ扱コとコ〜コあコらコ〜コ中コ入

子方一う 吉野龍田の花紅糸 日 更科裁跡

の月をき 獅子園弘旋射を習

雨蒙雲や羨まらん 獅子 解ノル小

秘曲の面白さ ねめぐる

舌の酔もす 眠りも

来るをうりたるも 去後トし

お節よーと後まおく 獅子又ハ
援もあてやくと目を引た
袖を振りまきあまふまき
あゝ歌をいふあにきつあ
抑おのまに何者ぞ 身ミの付
安田の庄日女まがその子に花着

石橋

梗概

(所) 唐土清涼山

(季) 四月

大江廣基出家して寂昭法師と号し、唐に渡り此處彼處の佛蹟を拜み廻りたる後、清涼山に到り彼の有名なる石橋の袂に佇めり。折しも山賤人來りければ、法師は眼前の石橋つきて尋ね更に對岸は文珠の浄土清涼山なる由を聞きたれば、橋を渡りて浄土に入らんとす。山賤則ち之れを留め、先づ石橋の濫りに渡るべき橋にあらざることを語り、又此の橋を渡る事の危険をのべ、橋の起源など詳しく説き、それとなく無上正覺に到るの至難苦行なることをほのめかしけるが、やがて清涼山より笙歌聞えて奇特あるべければ、暫く待ち給へとて去りぬ。かくて絢爛鮮やかなる牡丹を分けて獅子現はれ、勇壯美麗なる獅子舞を見せけるとなり。

石橋 五番目

役別	装束
シテ 権夫	面、小尉 尉髪 着付小格子厚板 水衣(肩上セ) 腰帯 扇(可シ) 貝装 杖
後シテ 獅子	面、獅子口 色鉢巻 赤頭 着付厚板 半切 法被(肩上セ) 腰帯
ワキ 寂照法師	金八角帽子 着付白綾 白大口 紫水色 腰帯 掛絡 扇 水晶数珠

作物 紅白牡丹 (壹置其重ニ一本ツ、立ル)

石橋 重習

是^{コト}尖^カ江^ガの定^カ基^ダ出^モ家^ト寂^シ照^{ヤク}法^{セウ}師^{ホツシ}
 にては我^ニ入^ニ唐^ニ渡^{タウ}夫^カの帝^カを^カ討^カひ^ナ只^ナ
 今^シ清^{ヤル}涼^{リヤウ}ぶ^ウく^{ゼン}あ^リり^{ヤウ}の^ウそ^ウを^ウや^ウ石^{ヤル}橋^{カウ}
 小^コく^クの^ウ暫^{ヤス}く^ク休^{ヤス}ら^スひ^ス橋^{ハシ}を^ヲ渡^{ワタ}ら^ズや^ト
 お^のひ^のお^のひ^の松^{マツ}風^{カゼ}の^ハ花^{ハナ}を^ヲ新^ニ小^コ

吹流してあふよも運ぶ山路が那

^上山路日暮れぬ悲歌牧笛の声

人る万事あはぐに世を渡り行

舟の有様お母のしる眼の糸

光れ陰をさ送りらん ^中 輝く心

巻く糸であふ又路をたち隔て

^上入流る方よ白波のち谷の川

おと雨あふく交る松の風な

実や穂のこよま日の客たりし

今身の上はあられり

^泪 暫休よ海へあひつ ^心 りふを成

山人よ心名揚ぶる ^心 ちんぶをそ

石橋よその向ひの文珠の身は清原山

能くは踊る人 身原を以て意ふ

はせりけ橋を渡らうとてふこひ

将に其名を渡はひては僧を傳と

笑へ人も愛ふこ月日を送り難は

捨身のけりてあそ橋をば渡り給

ひー上獅子上の法を念ひていも

先撥ひをなすこころをまけ我法かの

何きたそえけりたたまいの橋を

容易く思ひ渡らんやあら危し

のち後やな 只尋常の行人は

たふあう渡らぬ橋よあふ び境

石橋
かげ流波のさきよつたるで敷きまはる。

流臺ウツボやそでい旁ナリ方クラ書ラうして身ミの毛モ

よだつ谷コ深カき 叢イハホ娥ガたらひ石

石イシふ 石イシの橋ハシ

昔コト滑コケりて足タラシまたもらひ 渡ワタれば

目メもくれハシひよヒもモや 上ウヘの空ソラは

石イシの橋ハシ 先マにマはハせセ橋ハシのノふ

あアいイ隙ヒめメけケ橋ハシのノ面オモをヲ足タラシもモら

まマしてシ下シにニ流ナ利リもモあアらラ波ナミのノ遠トホ空ソラ

をヲ渡ワタるル如ニくクあアりリ危ヤしシやヤ目メもモくクまマ

心ココロもモ消クえエとト成ナふフなりリ凡オホ庸ホのノ人ヒトのノ心ココロ

思オモひヒもモよヨらラぬヌ事コト 如ニてテはハのノ

石橋

石橋

橋の謂委しく物活ゆオカケ上ウヘとれ
 天地冥辟の故来ぬ露を降して
 國を渡るはそを形もち天の浮橋を
 してキヤウ其邦國を世界よ能て
 橋の名所極むて 水波の程
 を遠まごが民富める世をわらも

別ち橋の純と名オヤ下シモ 物もよけヤ
スナハ石橋とヤス人づるの渡せる橋ふれを
 水のまこと物現してづける石の橋
 ちれを石橋と名を名付けりヤ
 おりて橋ふ又より狭うして苔
 甚と滑りなり 其長さ三丈余ニ

石橋

五

谷のそくばく深き車子丈餘は
及る里上よの流の系をより物り
て下流利おも白波のきる月もゆる
合ひく山河表動し海塊を動か
せり橋のきまをらん渡をばをふ
縁から親ひのたとく夕陽はぬの

後よ虹をなせる女又らをりきる
形ちあり遠く不縁んと谷を
見れば是次ましく肝消へ進ん
で渡る人もなす神愛佛かき非の
誰がけ橋を渡るき向ひの文珠の
淨土にて常は空を教はれたゆりて

しん

下

簫笛シヤウク琴ケキの空クウは後ゴ夕キヨ日のヒのノをモよビ歩ヒくキ
シヤウクノケキノクウノキヨノヒノノノモノビノヒノキ
 目メのノ奇キ特トクあラたタあリ志シづク
メノノノキノトクノアノラノタノアノリノシノズノク
 待マせセ給キやヤ新シン向キョウのノ時トキ良ラもモ今イマ幾キ
マノセノキノヤノシンノキョウノノノトキノラノモノイマノキ
 程チふフよヨもモとトとト中チユウ入ニ 獅シ子シルル急キウ 獅シ子シ圓エン丸ワ旋セン
チノフノヨノモノトノトノトノチユウノニノシノシノルノキウノシノシノエンノワノセン
 のノ香カウ環エンはハみミぎギんン 牡ウシ丹タンのノ
ノノカウノエンノハノミノギノンノウシノタンノノ
 花ハぶブさサ匂ニウひヒ満マンちチ大ダイ冲チュウ利リ冲チュウ乃ノ
ハノブノサノニウノヒノマンノチノダイノチュウノリノチュウノノ

獅シ子シ丸ワおオてテやヤ藤フジやヤ牡丹ボタン芳ホウくク
シノシノワノオノテノヤノフジノヤノボタンノホウノク
 黄ワウ金キンのノ葉エフ現ゲンれレてテ花ハ小コ戯ゲキまマ枝エよヨ
ワウノキンノノノエフノゲンノレノテノハノコノゲキノマノエノヨ
 柳リウ折セツをヲ実ミもモ上ウなナらラ獅シ子シ王ワウのノ勢セイひヒ
リウノセツノヲノミノモノウノナノラノシノシノワウノノノセイノヒ
 藤フジのノ草クサ木キもモなナまマ時トキあアれレやヤ万マン歳サイ
フジノノノクサノキノモノナノマノトキノアノレノヤノマンノサイ
 子シ秋シュウとト菊キクとトあアらラ万マン葉エフ子シ秋シュウとト舞マユ
シノシュウノトノキクノトノアノラノマンノエフノシノシュウノトノマユ
 納ナクめてテ獅シ子シのノ産サンふフそソをヲ直チキりリけケれレ
ナクノメノテノシノシノノノサンノフノソノヲノチキノリノケノレ

シヤウク

シヤウク

不引 残る留

324
285

著者權所
復製不許

昭和
改本
版

昭和四年九月五日印刷
昭和四年九月十日發行

訂正者

廿三世
金剛右

金剛右京

發行者

檜常之助

發行所

東京市神田區錦町二丁目拾番地
合資會社
檜書

檜書

檜書店京都出張所

京都市二條通麩屋町東北角

終

